

山陽自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

I

笛田古墳

1982

兵庫県教育委員会

はじめに

五つの国からなる兵庫県は原始・古代の昔から文化が開け、多くの貴重な文化財が残されております。

これらの文化財は、歴史を正しく理解し新しい文化を向上させるためにかかせないものであり、大切に保護・保存し次代に申し送ることが現在にある者の責務と考えます。

兵庫県を横断する山陽自動車道の建設に先立って、揖保川町に所在する笠田古墳の発掘調査を日本道路公団の委託をうけ、兵庫県教育委員会が調査を実施いたしましたが、今日、その調査結果をとりまとめ、本報告書を刊行いたしました。

この報告書が文化財保護と文化向上のため活用されることを期待しております。

最後に、調査のため、御指導、御協力を頂いた多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和57年3月

兵庫県教育委員会

教育長 森 脇 隆

例　　言

1. 本書は、山陽自動車道建設に伴って、昭和56年度に事前調査を実施した、兵庫県揖保郡揖保川町大門字笠田に所在する笠田古墳の調査報告である。
2. 調査は、日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が事業主体となり、県教委社会教育・文化財課主任 西口和彦、技術職員 種定淳介が担当した。
3. 本書の執筆は、Ⅱを西口、その他を種定が行った。
4. 掲図のうち、遺構の実測は西口と種定が行い、遺物の実測、浄書は主に種定が行った。
5. 掲載の写真は、遺構は主に西口が撮影し、遺物は森 昭氏の手を煩わした。
6. 本書の編集は、西口と種定が行った。
7. 本書に使用した方位はすべて磁北を示し、標高は海拔高である。
8. 本書に掲載している挿図と図版の遺物番号は一致する。
9. 現在、本報告書にかかる出土遺物及び写真、実測図等は、兵庫県教育委員会・魚住分館において保管している。ご活用いただきたい。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	3
III 古墳の構造	5
(1) 立地と現況	5
(2) 墳丘	5
(3) 埋葬主体部	6
(4) その他の遺構	9
IV 出土遺物	12
(1) 遺物出土状況	12
(2) 須恵器	12
(3) 土師器	24
(4) 鉄器	24
(5) 石器	25
(6) その他	25
V まとめ	26
(1) 祭祀形態について	27
(2) 須恵器について	27

挿 図 目 次

第1図	笠田古墳位置図	1
第2図	笠田古墳周辺遺跡分布図 ($s = \frac{1}{20000}$)	2
第3図	位 置 図 ($s = \frac{1}{2000}$)	4
第4図	墳丘測量図 (調査前) ($s = \frac{1}{100}$)	6
第5図	墳丘測量図 (調査後) ($s = \frac{1}{100}$)	7
第6図	墳丘断面図 ($s = \frac{1}{60}$)	8
第7図	土器溜出土状態 ($s = \frac{1}{10}$)	9
第8図	大甕出土状態 ($s = \frac{1}{20}$)	11
第9図	出土須恵器実測図 I ($s = \frac{1}{3}$)	17-18
第10図	出土須恵器実測図 II ($s = \frac{1}{3}$)	19
第11図	出土須恵器実測図 III ($s = \frac{1}{3}$)	21
第12図	出土須恵器実測図 IV ($s = \frac{1}{6}$)	22
第13図	出土須恵器実測図 V ($s = \frac{1}{6}$)	23
第14図	出土鉄器実測図 ($s = \frac{1}{2}$)	24
第15図	出土石器実測図 ($s = \frac{1}{2}$)	25
第16図	出土古錢拓影 ($s = \frac{1}{1}$)	25

図版目次

図版1	笹田古墳	本文対照頁
1.	古墳遠景（西から）	5
2.	古墳全景（調査前）	5
図版2	墳丘	
1.	墳丘全景（トレーン設定後）	5
2.	墳丘全景（調査後）	6
図版3	土器溜	
1.	土器溜出土状態（北から）	9
2.	土器溜出土状態（東から）	9
図版4	大甕	
1.	大甕出土状態	10
2.	大甕底部据付状態	10
3.	大甕A、大甕B	10
図版5	Ⅲ区墳丘裾部	
1.	大甕掘り方検出状態	10
2.	Ⅲ区土器溜と大甕掘り方	10
図版6	出土遺物I	
	土器溜内須恵器（1）	12
図版7	出土遺物II	
	土器溜内須恵器（2）	14
図版8	出土遺物III	
	須恵器（1）	16
図版9	出土遺物IV	
	須恵器（2）	16
図版10	出土遺物V	
1.	須恵器（3）	15
2.	鉄器、石器	24

I 調査に至る経過

山陽自動車道は、吹田市と山口市を結ぶ総延長距離約426kmの高速道路である。兵庫県姫路市と岡山県備前市間の約51.7kmの施工区間も着々と工事が進み、周辺部はあらゆる意味で、大きく変貌しつつある。日本道路公団では、本線工事と並行して、竜野市揖西町の竜野西インターチェンジ（仮称）と一般国道2号線との連絡をはかる路線工事に着手した。

一方、事前の分布調査の結果では、揖保郡揖保川町大門の尾根上で若干の須恵器が採集されたが、古墳であるとの確証は得られず、遺跡の性格は不明瞭であった。そのため、昭和56年3月2日、現地へ県教育委員会社会教育・文化財課技術職員吉識雅仁を派遣し確認調査を行ったところ、地山を掘削した周溝が検出され、墳形をとどめてはいないが古墳であることが認められた。

兵庫県教育委員会は、かかる事態に対して日本道路公団との協議を重ねたが、路線変更ならびに施工期間の延長は不可能な状況から、施工路線内に所在する本墳の全面調査を実施して記録保存を行うこととなった。発掘調査は、昭和56年4月10日から4月30日までの16日間を要して実施した。

調査の組織は以下のとおりである。

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当 同 社会教育・文化財課

主任 西口和彦

技術職員 種定淳介

調査補助員 小谷五郎、小谷義男、町口弘子

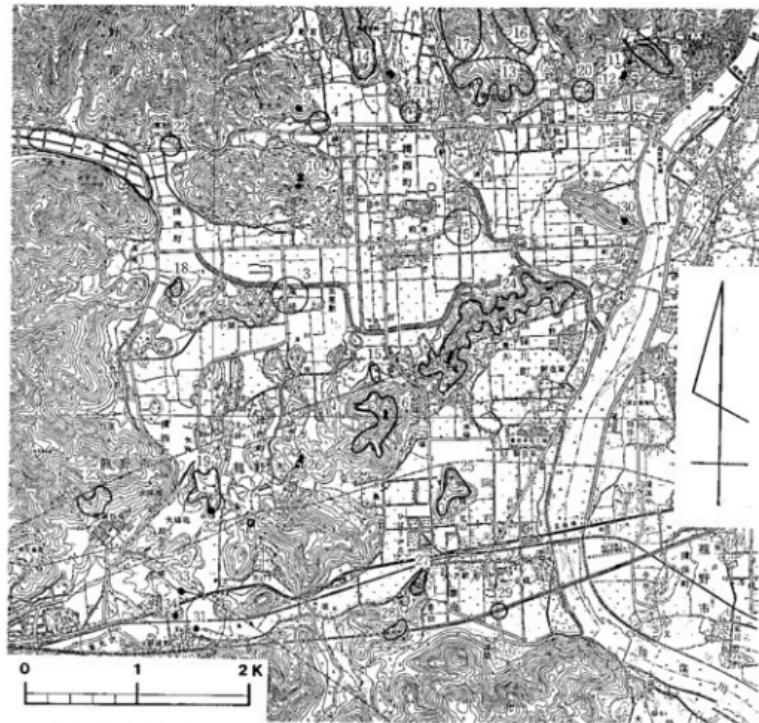
整理作業員 成田雅俊、金山恵子、渋谷雅子

田浦奈津美、二階堂康子、光沢

鈴子、村山秀代、森田順子



第1図 妻田古墳位置図



1 笹田古墳

庵野市

2 小犬丸遺跡

3 尾崎遺跡

4 堂の下遺跡

5 佐江遺跡

6 三ツ塚遺跡

7 白鷺山墳墓群

8 三味山古墳

9 東光寺古墳

10 池の谷古墳

11 孤塚古墳

12 西宮山古墳

13 霧雲寺古墳群

14 新宮東山墳墓群

15 竜子群集墳

16 小神群集墳

17 中垣内群集墳

18 台山群集墳

19 土闌群集墳

20 小神廻寺

21 中垣内廻寺

22 小犬丸廻寺

23 大師原古窯址群

攝保川町

24 離久山墳墓群

25 神戸北山古墳群

26 片島古墳群

27 サンマイ山群集墳

28 畠田群集墳

29 山津屋遺跡

30 半田山古墳

相生市

31 掘森古墳

32 宿称塚古墳

33 那波野古墳

34 丸山古窯址

第2図 笹田古墳周辺遺跡分布図

(s = 1:50000)

II 位置と環境

篠田古墳¹は、揖保郡揖保川町大門字篠田に位置する。行政区画上では、揖保川町に属するが、周囲の地形状況から篠田古墳の歴史的位置を考えると、竜野市揖西町周辺の遺跡に加えた方が良い様である。

縄文時代の遺跡には、小犬丸遺跡²がある。

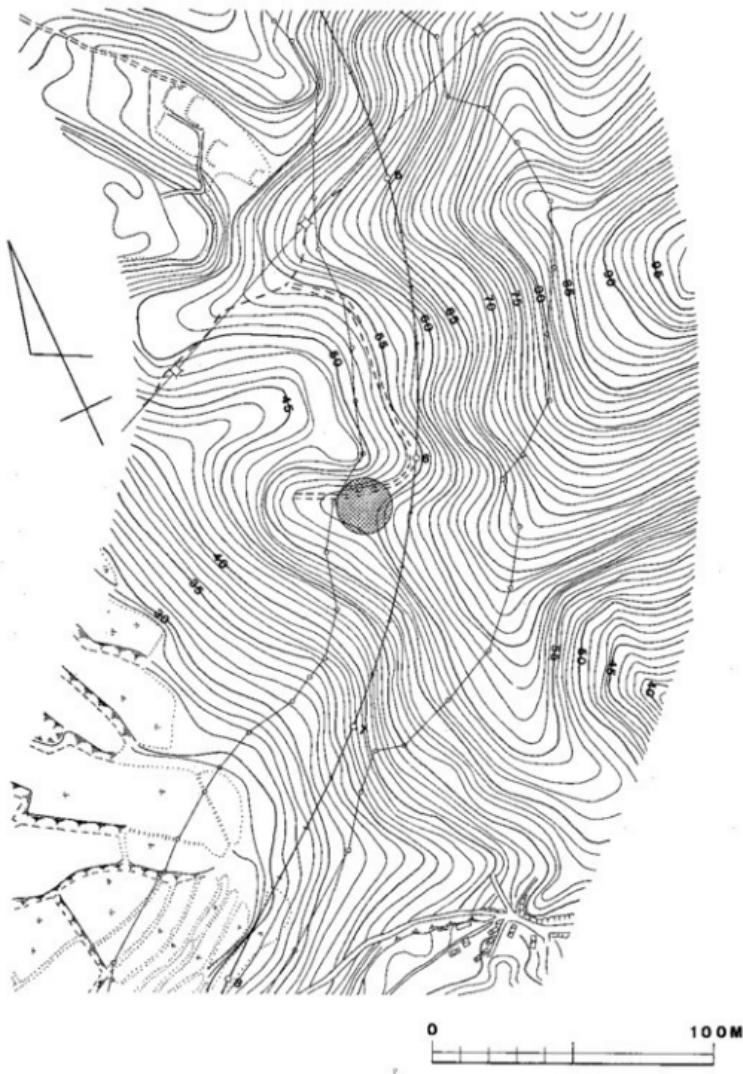
小犬丸遺跡は開墾整備事業によって発見された遺跡で、遺構については不明であるが縄文時代晩期初頭頃と考えられている。

弥生時代遺跡は、揖保川右岸の地には前期の遺跡が確認されておらず、尾崎遺跡³と佐江遺跡⁵の中期遺跡が最古のものである。尾崎遺跡は、小犬丸川の改修に際し発見された遺跡である。発掘調査によって多量の土器が出土し、今後集落址究明に貴重な資料が得られた。

次に、竜野市と揖保川町両地域の遺跡分布で、全国的に注目を集めたものに弥生墳墓群がある。竜野市と揖保川町にまたがる養久山墳墓群²⁴を始め、二基の方形墓よりなる新宮東山墳墓群¹⁴、後漢鏡を出土した白鬚山弥生墳墓⁷等多くの遺跡が知られている。

古墳時代には、前期古墳として養久山1号墳や龍子三ツ塚古墳⁶があり、龍子三ツ塚古墳からは波文帶神獸鏡が二面出土している。中期の古墳として注目されるものに相生市宿称塚古墳³²がある。直径40mの円墳で円筒埴輪を巡らせ、古式の須恵器を出土している。後期古墳には西宮山古墳¹²がある。横穴式石室を内部構造とする前方後円墳で、垂飾付耳飾りや装飾付須恵器を副葬している。また群集墳も周辺の山麓部に多く分布している。相生市那波野古墳³³は巨石を用いた横穴式石室墳である。

歴史時代になると、古代山陽道が当地方の山麓部を通過し、畿内仏教文化がいちばんよく開いた地域である。山陽道に沿って小神、中垣内、小犬丸各地には瓦の散布が認められる。小神庵寺²⁰は飛鳥時代創建と考えられる寺院である。また小犬丸庵寺²²出土の軒丸瓦からは、小犬丸庵寺は駅跡ではないかと推定されている。



第3図 位 置 図 ($S=1:2000$)

III 古墳の構造

(1) 立地と現況（第3図、図版1）

篠田古墳は標高143.1mの觀音山の西側にあたり、山塊が南西に派生したのち北西と南へ分岐した前者の尾根基部中央に立地し、墳頂部で54.44mの標高をもつ。北西下方の谷水田との比高差は約30mである。この尾根は比較的平坦な面であるが、その北と南西は急峻な斜面となり谷へ続いている。また、本古墳から南西方向へは眼下に狹隘な平野を望み、遠く相生の渓を眺望する。

調査前の観察では墳丘としての高まりは認められず、墳形を識別することさえ困難な状況であったが、若干の須恵器の散布と、露出した地山を切った周溝の一部が発見され、封土の著しい削平と流失を被った古墳であると判断できた。なお、この古墳の北西に隣接した尾根先端部もわずかに平坦面を残しており、本墳と同様に削平を受けた古墳である可能性が強い。このため、今回調査した篠田古墳は、篠田古墳群あるいはその支群の中の一基と言えよう。

(2) 墳丘（第4、5、6図、図版2）

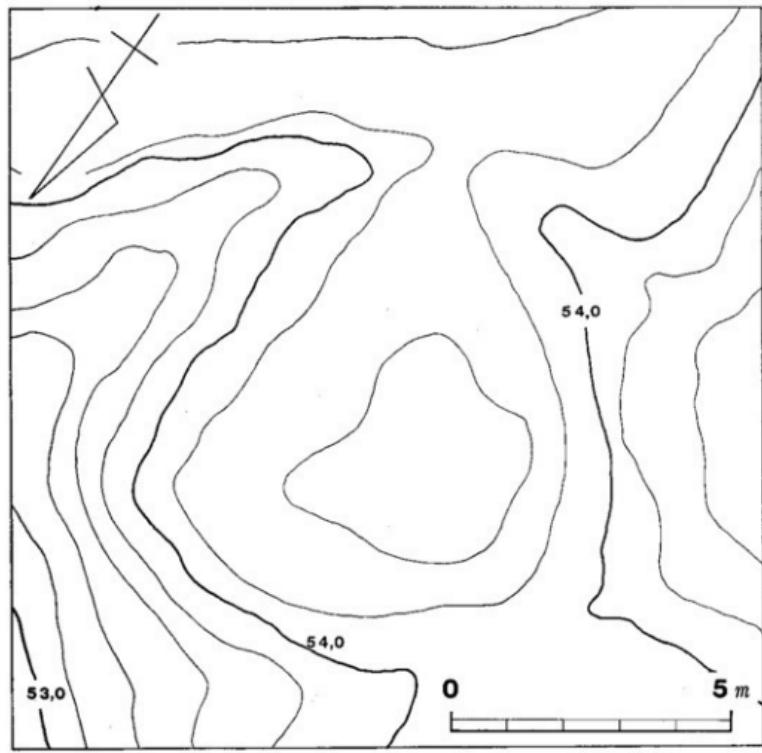
本墳は封土がかなり流失しており、尾根稜線に沿うトレンチにみられる墳丘の見かけの高さは約15cm、周溝底部からも約65cmを測るにすぎず、遺存状態は極めて悪い。墳丘の構築に際しては、事前の地山整形はやや簡略なものであり、直接盛土を行っているようである。これは旧地表面が比較的平坦で、傾斜も緩慢であったことに起因するのかもしれない。

周溝は尾根ののびる主軸に直交して、尾根基部側と先端側の2ヶ所に設けられており、古墳を区画して、さらに墳丘の見かけの高さを相対的に増加させている。まず、尾根基部の周溝はⅠ区とⅣ区にわたり古墳をほぼ半周している。Aトレンチの断面では、溝の幅2.2m、深さ0.4mを測り、半円形に近い断面「U」字形になっている。この周溝によって古墳は尾根から分離されたことになり、BトレンチとDトレンチの谷側では自然地形に沿って必然的に消滅してしまう。Ⅳ区の周溝底部からは少量の炭が検出された。尾根先端部に設けられた周溝は、Cトレンチでは幅1.0m、深さ0.2mの断面「V」字形を呈し、一部で屈曲して谷側斜面へと統く。Ⅲ区の周溝内と周溝の延長上に土器溜と大甕があり、他の遺物もⅢ区から集中して出土している。周溝はⅠ区とⅣ区では赤褐色粘質上の地山を掘削しているのに比べ、Ⅱ区とⅢ区では暗黄色のも

ろい岩を掘って溝を設けている。このため前者より後者の方が粗雑であり、規模を縮小させて簡略化を図っている。

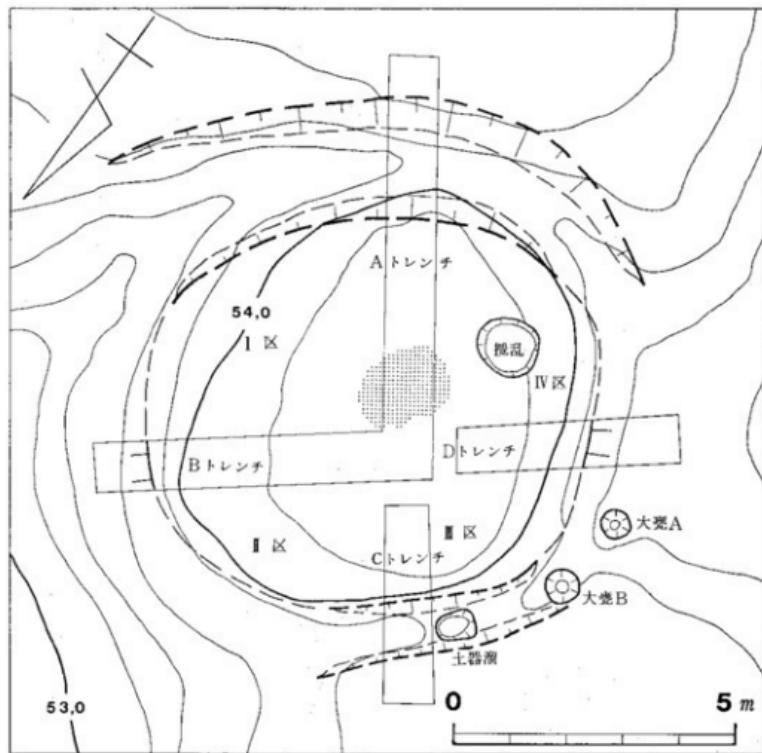
墳丘の平面規模は、A・Cトレンチ間で 6.7 m、その周溝最深部間で 8.2 m、B・Dトレンチ間で 7.0 m であり、直径 7 m 前後の若干歪んだ円墳と考えられる。

(3) 墓葬主体部

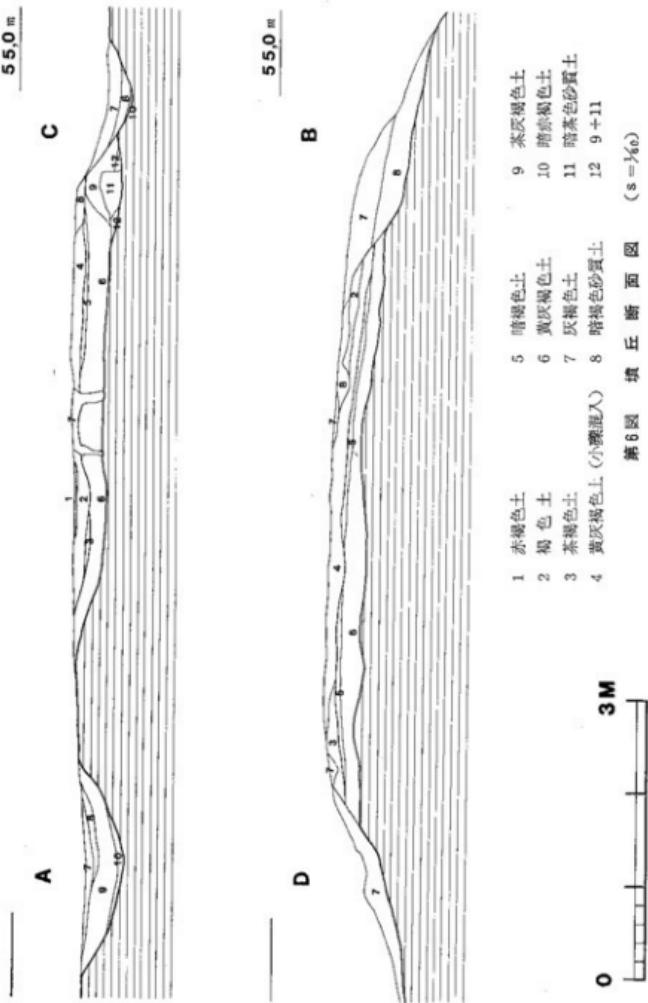


第4図 墳丘測量図(調査前) ($s = \frac{1}{100}$)

先に述べたように本墳は墳丘の削平が著しく、埋葬主体部は封土と共に流失している。しかし、周辺に石室として使用された石材は見られず、その抜き跡も検出されなかったため横穴式石室であるとは考え難く、直刀と鉄鎌が出土した赤褐色土層を棺床の一部と見なせば木棺直葬であった可能性が高い。ただ、その棺床は平面プランとして把握できる状態ではなく、主体部の規模、形態、埋葬主軸方位は不明である。なお、木棺埋置のための墓圹掘り方は地山まで達しておらず、かなり浅いものであったと推定される。



(アミ部は赤褐色土)
第5図 墳丘測量図(調査後) ($s=1:100$)



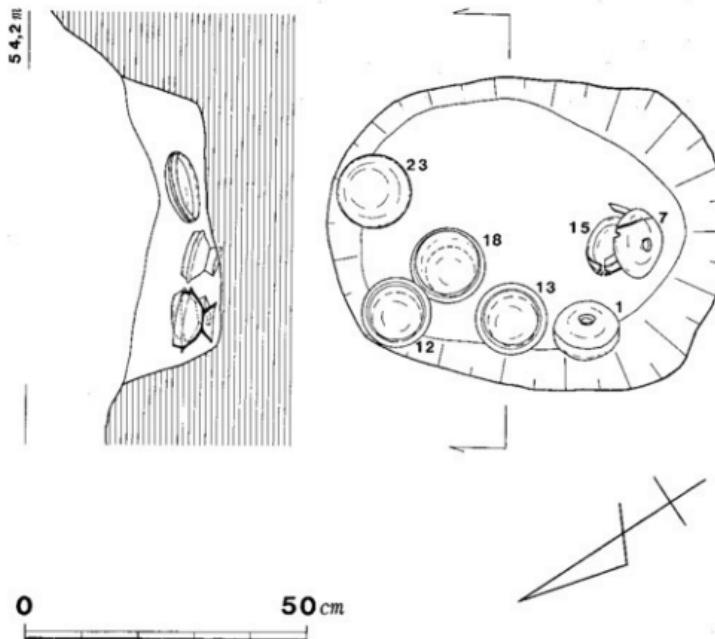
第6圖 填丘斷面圖 ($s = \gamma_0$)

(4) その他の遺構

土器窪 (第5、7図、図版3、5-2)

Cトレンチに接したⅢ区の周溝内に土塹を掘りこんだ土器窪である。平面プランは周溝に平行する長軸0.7m、直交する短軸0.43m~0.52mの長方形に近い不整橿円形になる。底面はわずかに凸面をなし、深さ0.13m、下端周辺では深さ0.15m~0.17mを測る。

出土した遺物は須恵器高杯10個体、杯身1個体、杯蓋9個体、土師器壺1個体である。土器

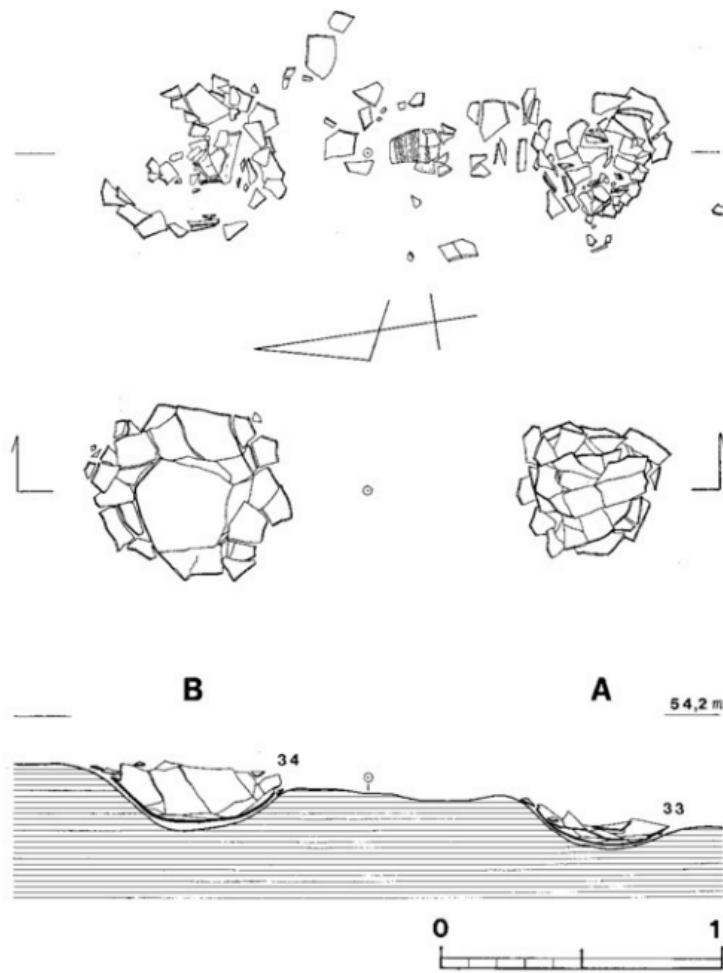


第7図 土器窪出土状態 (s=1/10)

は土塙底部中央がやや高いためか周囲の側壁に立てかけるように埋置されている。高杯は土塙底部よりわずかに浮いて、ほぼ正立に近い状態で置かれていた。明らかに蓋をしていたと知られるものではなく、蓋のみが側壁に立てかけている例にみられるように、本来高杯には蓋を被せられてはいなかったようである。また、高杯に比べ蓋の方が破損が進んでいる。1点のみの杯身は伏せた状態で出土した。なお、これらの遺物からは食物等の残存は認められなかった。

大 壺 (第5、8図、図版4、5)

Ⅲ区周溝内の、土器窪から約3.5m南に大壺A、同じく2m南に大壺Bがそれぞれ1.5mの間隔をもって据えられていた。大壺を検出した面では、A、Bともに口頭部と肩部上半が破片で散乱しており、埴輪の傾斜に沿って東から西へ流れている。土器片を取り上げ、底部を検出した面で、Aは南にある木の根のため若干移動しているが、Bは原位置を良好に保っている。掘り方は、Aは径0.58m、深さ0.10m、Bは径0.64m、深さ0.18mとかなり浅いものであり、器体のほとんどを地表に現わしたまま正置状態で据えられていたと考えられる。



第8図 大要出土状態 ($s = \frac{1}{2} \%$)

IV 出土遺物

(1) 遺物出土状況

本質は削平を被っているため、明らかに埋葬主体部に副葬されていたと考えられる遺物は鉄鎌と直刀に限られる。その他は土器溜と大甕を中心としてⅢ区の埴掘部に集中している。原位置を保っている土器溜と大甕以外はすべて移動したものであり、埴丘、埴縫、周溝に散乱している。土器、鉄器以外には砥石と古錢が採集された。

本墳から出土した遺物は次の通りである。

須恵器	杯 蓋	11個体	(1~11)
	有蓋高杯	10個体	(12~21)
	無蓋高杯	1個体	(22)
	杯 身	1個体	(23)
	壺	2個体	(24、25)
	直口壺	1個体	(26)
	短頸壺	1個体	(27)
	装飾付合付壺	1個体	(28)
	小型甕	1個体	(29)
	中型甕	3個体	(30~32)
	大型甕	2個体	(33、34)
土師器	壺	1個体+α	
鉄器	鉄鎌	1個体	(35)
	直刀	1個体	(36)
石器	砥石	1個体	(37)
その他	古錢(寛永通宝)	1個体	(38)

(2) 須恵器 (第9、10、11、12、13図、図版6、7、8、9、10-1)

杯 蓋

11個体出土し、I類からV類に分類することができる。

I類

7個体がすべて土器溜より出土している。口縁部をのぞき、他はほぼ同一形態のもので、調整、色調、胎土、焼成とともに共通した要素をもつ。上面凹状のつまみを付す天井部は丸みをもち、上面はやや平らで、天井高は器高の約半分である。稜は鋭さを若干残しており、下方に沈線がめぐる。口縁端部は丁寧な面とりのため、内傾する浅い凹面をなす。ヘラ削りは天井部の殆からずに施されるがやや難であり、大半は逆まわりである。

I類は口縁部の形態よりさらに3つに分類することができる。すなわち、口縁部が下外方もしくは外輪気味に下ったのち短く外反し端部は内傾する浅い凹面となるIa類、口縁部がほぼ垂直に下ったのち短く外反し、端部は内傾する凹面となるIb類、口縁部が内輪気味に下ったのち短く外反し、端部は内傾するIc類である。

Ia類

1は完形品で口径13.2cm、器高4.8cm、つまみ高0.7cmを測る。表面は灰の降着のため黄灰色を呈するが、つまみを中央として直径9.5cmの円内には灰が認められず、高杯を重ねて焼成したことがわかる。裏面は灰色を呈し、砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。2はほぼ完存し口径13.6cm、器高5.1cm、つまみ高0.9cmを測る。1と同じく直径8.8cmの灰の降着していない円がある。色調、胎土、焼成とも1と同様である。3は%残存し、口径13.5cm、器高5.1cm、つまみ高0.8cmを測る。1、2に比べ稜はシャープさを欠き、口縁端部の凹面はやや深い。高杯との重ね焼きの痕跡はない。色調、胎土、焼成は同様である。

Ib類

4は口縁部の大半を欠くが、復原口径13.3cm、器高5.3cm、つまみ高0.8cmを測る。表面は全面に灰が降着し黄灰色、裏面は灰色を呈する。若干の砂粒を含み、焼成は良好である。5は%残存し、口径14.1cmでI類の中では最大の口径をもつ。器高は5.6cm、つまみ高は0.7cmである。6は%を残すのみであり、復原口径は12.9cmとI類の最小値をもつ。器高4.6cm、つまみ高0.7cmを測る。5と6は、色調、胎土、焼成とも4と同じである。Ib類には、高杯を天井部にのせた重ね焼きの痕跡はない。

Ic類

7はほぼ完形で、口径13.2cm、器高5.1cmを測り、つまみ高0.7cmの小ぶりのつまみを付す。器表は全面に灰が降着し、器肌はザラザラしている。表面は黄灰色、裏面は灰色を呈する。砂粒を若干含み、焼成は良好である。

II類

I類と比較して稜はやや鋭く、下方に明瞭な沈線はない。口径もひとまわり大きい。長い口縁部は直線的に下外方に下ったのち短く外反し、端部はわずかに内傾する浅い凹面となる。天井部には上面凹状の小さいつまみを付す。8は約%残存し、口径14.8cm、器高5.3cm、つまみ

高0.6cmを測る。表面は灰色、裏面は淡灰黄色を呈する。わずかに砂粒を含み、焼成はやや不良で軟質の感じを与える。I類と同様、土器溜からの出土であるが、形態、色調、胎土、焼成は異なっており、高杯II類21とセットをなす。

III類

天井部はI類と大差は認められないが、口径はひとまわり大きく、稜はやや鋭く、下方に沈線がめぐる。口縁部はほぼ垂直に下ったのち中央部で下外方に内傾気味に下り、短く外反する。端部は内傾する凹面となる。9は口縁部の一部を欠くが、口径14.4cm、器高5.8cm、つまり高1.0cmである。表面は灰が滲みて黄灰色、裏面は淡灰色を呈する。砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。I類、II類と同じく土器溜からの出土のもので、杯身2、3とセットをなす。口径が大きいこと以外ではすべての点でI類に近似している。

IV類

破片であるため、天井部の形態は不明であるが、稜は形態化して丸くおさめられ、下方に凹線を施しているのみである。口縁部はほぼ垂直に下ったのち短く外反し、端部は水平な浅い凹面をなす。10はIV区の周溝からの出土で、復原口径13.6cmを測る。砂粒をほとんど含まず、淡灰色を呈する。焼成はやや甘い。

V類

III区とIV区の表土下層から細片となって出土したかえりを有する杯蓋である。11は復原口径11.6cm、かえり径9.8cmを測る。口縁部は外下方へ下ったのちほぼ垂直に下り、端部は丸い。かえりの端部も丸く、口縁端部より下方へは張り出さない。淡緑灰色を呈する。若干の砂粒を含み焼成はやや不良である。

有蓋高杯

すべて土器溜からの出土であり、合計10個体である。I類とII類に分類することができる。

I類

I類は9個体で、たちあがりを除いてすべて共通の要素をもつ。断面三角形の受部は短くほぼ水平にのび、端部は丸い。底体部はやや深く、ほとんど平らに近い。たちあがり端部は内傾する浅い凹面となる。底部前後にヘラ削りが施されるが椎である。脚部は基部が太く、下外方へ短くのび、外端面はほぼ水平もしくはわずかに内傾する凹面となる。脚は短脚で、透し孔を有しないのが特徴である。I類は、いずれも受部上面にわずかに蓋の一部の熔着がみられ、高杯に蓋を正常に被せた状態で焼成していたと考えられる。I類は、たちあがりが内傾してのびたのち短く外反するIa類と、内傾してのびたのち直立するIb類に細分しうる。

Ia類

12は完形品で、口径11.1cm、受部径13.2cm、脚端径9.5cm、器高7.6cm、たちあがり高1.6cmを測る。受部とたちあがりの境は浅い凹線がめぐり、脚端部は段となる。13は完形品で、口径

11.4cm、受部径13.3cm、脚端径9.4cm、器高7.4cm、たちあがり高1.4cmである。体部はほぼ直線的に上外方にのび、脚端部は内側で接地する。14は完形品で、口径11.1cm、受部径13.2cm、脚端径9.5cm、器高7.1cm、たちあがり高1.6cmである。受部とたちあがりの一部に焼成時のひずみがある。脚端部はやや深い凹面となる。15はほぼ完形で、口径11.4cm、受部径13.5cm、脚端径9.7cm、器高7.0cm、たちあがり高1.4cmである。体部は外上方にのびたのちはほぼ直立するため、他より浅い感じを与える。16は約残存し、口径11.7cm、受部径13.7cm、脚端径9.2cm、器高7.1cm、たちあがり高1.5cmである。受部とたちあがりの境は凹線がめぐる。17は約残存し、復原口径11.9cm、受部径13.7cm、脚端径9.2cm、器高7.0cm、たちあがり高1.6cmを測る。Ia類はいずれも灰色を呈し、器表には灰が降着した部分もある。胎土にはわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。

Ib類

18は完形品で、口径11.0cm、受部径13.2cm、脚端径9.7cm、器高7.0cm、たちあがり高1.7cmである。たちあがりは強い折曲をもたない。底部内面には亀裂が走る。19はほぼ完存し、口径11.4cm受部径13.4cm、脚端径9.4cm、器高7.3cm、たちあがり高1.6cmである。20は大半を欠損しており、復原口径10.6cm、受部径12.6cm、脚端径9.0cm、器高6.6cm、たちあがり高1.5cmと比較的小ぶりである。Ib類は、器表は灰色を呈し、一部に灰の降着がみられる。胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。

II類

I類とともに土器溜より1点のみ出土している。I類と比較して全体に大きく、特に脚部は器底が薄く、脚高が高いために不安定に見える。たちあがりは Ia類と同様であるが、受部は薄く水平にのびたシャープなつくりである。底体部はやや深い。ヘラ削りは I類よりも範囲が広い。色調、胎土、焼成も異なり、杯蓋II類とセットになることは明らかである。21は約残存し、復原口径11.7cm、受部径13.9cm、脚端径10.5cm、器高7.5cm、たちあがり高1.7cmを測る。底体部と脚部表面は灰色、裏面は淡灰黄色を呈する。胎土に砂量をわずかに含み、焼成は不良である。

無蓋高杯

口縁部がⅢ区墳壙、脚部がCトレンチから出土している。22は復原口径15.2cmを測る。口縁部は外反してのびたのち上方にのび、端部は丸い。脚部外端面は外傾する凸面状となる。台形または長方形の透しをもつ。いずれも丁寧な回転ナデ調整が施され、色調は緑灰色を呈する。胎土は精良で、焼成も良好である。

杯身

高杯と杯蓋に混在して土器溜より出土した。23は完形品で、口径12.5cm、受部径14.7cm、器高5.0cm、たちあがり高2.1cmである。たちあがりは内傾してのびたのち短く外反し、端部は内

傾する凹面をなす。受部はほぼ水平にのび、端部は丸く、上面に蓋を正常に被せて焼成した痕跡を残す。底体部はやや深く、平らに近い。底部に時計回転のヘラ削りが施されている。灰色を呈し、わずかに砂粒を含むが焼成は良好である。9とセットになる。

縫

III区とIV区の墳壙から2個体分の破片が出土している。24は図面上で復原したものであるが、口径11.1cm、器高12cm前後、体部最大径10.4cmを測る。口頭部は基部が太く、上外方へのびたのち凸線をめぐらせ、さらに上外方へのび、端部は内傾する凹面をなす。肩部は外下方へ下り、最大径を%位に有したのち内下方へ下る。凸線上位と頸部にシャープな波状文をめぐらせる。体部最大径の位置に円孔がみられる。暗青灰色を呈し、胎土は密、焼成は良好で、茶褐色の釉がかかっている。25は約%残存するのみであり、口径15cm前後、器高13cm前後、体部最大径11.2cmに図上復原できる。口頭部は大きく上外方へのび、シャープな凸線をめぐらせ、その上下に波状文を施す。肩部は外下方に張り出し、体部最大径を%上位にもつ個所を2条の沈線をめぐらせて区画し、その間を刷毛状具の刺突文によって埋める。灰色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。

直口壺

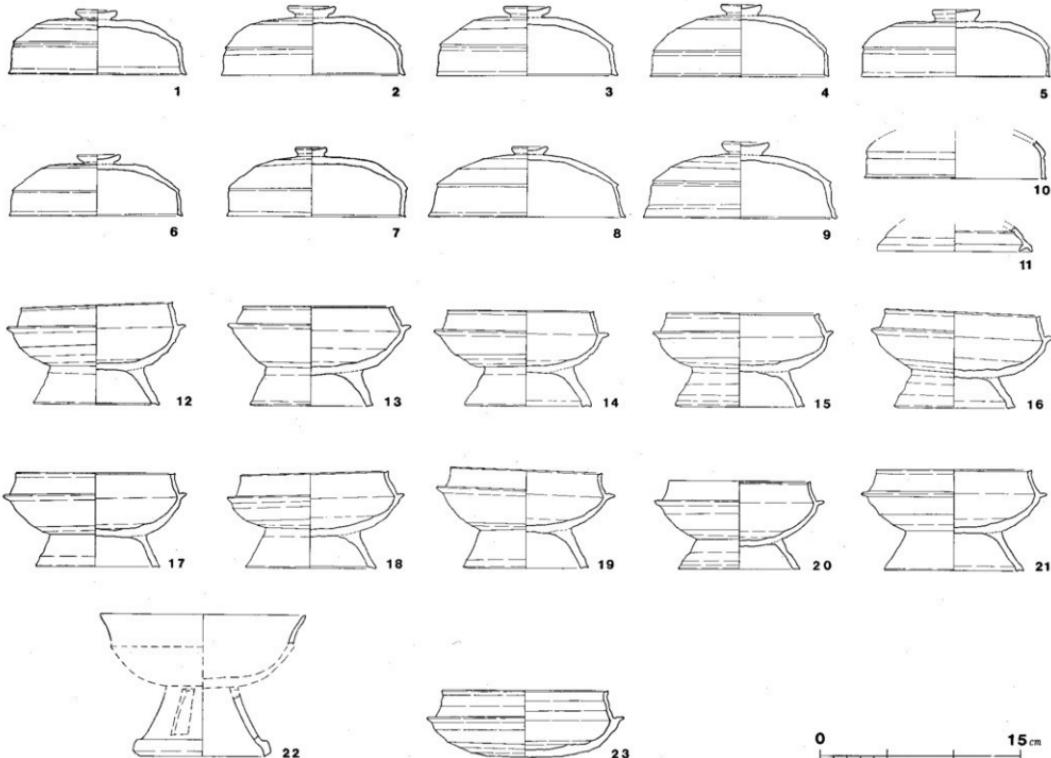
26はVI区の墳壙から出土したものである。約%残存し、口径10.5cm、図上復原の体部最大径は11.9cm、器高12.7cm前後を測る。口頭部は上外方にのび、短く外反して端部は丸くおさまる。中位に断面三角形の鈍い凸線を2条めぐらせ、その下位に波状文を施す。肩部は外下方へ張り出し、%上位に最大径を有して内彎して下る。全体を回転ナデで調整しているが、体部下半には一部細い叩きを残している。淡灰色を呈し、胎土は精良、焼成も良好である。

短頭壺

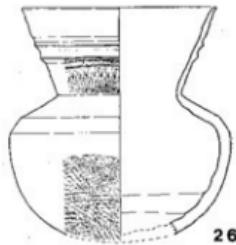
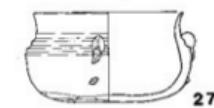
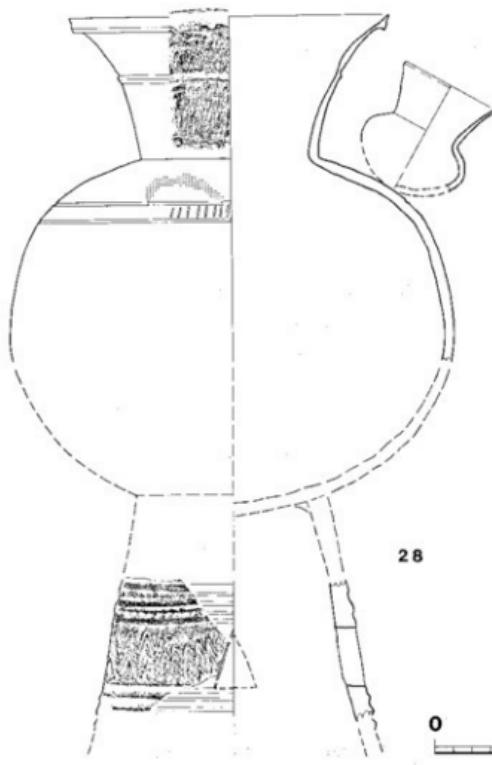
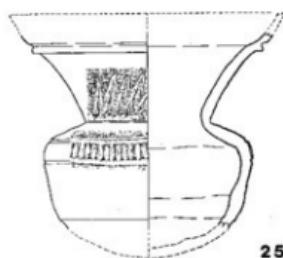
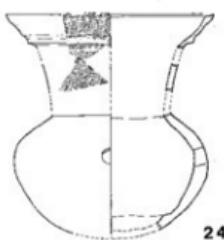
27はIII区とIV区に散乱して出土したものである。%残存し、口径8.1cm、器高4.9cm、体部最大径9.0cmを測る。口頭部は短く外轉して上外方にのび、端部は丸い。肩部は凸線状の鈍い段となり、ほぼ垂直に下って平らな底部へ続く。肩部には把手状の痕跡が認められる。底部に静止ヘラ削りを施している以外は回転ナデ調整である。灰色を呈し、自然釉のため光沢をもつ、胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良好である。

装飾付台付壺

28はII区、III区、IV区の墳丘、墳壙から細片となって出土したものである。本体となる壺は口頭部は外彎して上外方にのび、器壁はかなり薄い。端部はシャープな稜をなし、外端面は外傾して、復原口径17.1cmを測る。頸部中央のやや上方に鈍い凸線を1条めぐらせ、その上位に7~9本単位の波状文が1条、下位に9本単位のものが2条施されている。体部はほぼ球形をなし、肩部には弱い沈線が2条めぐり、その間を縦の浅い沈線で充填している。体部下半は検出されなかつたが、最大径は23.8cmである。全体は回転ナデで調整されているが、体部に細い



第9回 出土須恵器実測図 I
($\times \frac{1}{2}$)



0 15 cm

第10図 出土須恵器実測図 II (s=35)

横位平行叩きの痕跡を残す。灰色を呈し、胎土は密で、焼成も良好である。一部に暗緑色の光沢をもつ釉が流出しており、特に肩部沈線の上位にみられる逆「U」字状に釉が流れた部分には、いわゆる装飾子壺が配置されていたと考えられる。しかし、それが本体といかなる角度をもって接合していたかは不明である。

小壺は、完形に復原できるものはないが、破片からみて3個体分以上存在することがわかる。いずれも外反してのびる口頸部と、やや扁平な球状の体部からなる。図示したものでは、復原口径5.6cm、器高6.5cm前後、体部最大径6.1cmとなる。暗緑色の釉が器表全面を覆い、胎土は密で焼成は良好である。

脚部も破片が数点出土している。中央には3角透しが穿たれ、そこに10本単位の波状文がめぐる。それをはさんで、鋭い凸線が上位に3条、下位に2条残っている。色調は灰色を呈し、一部に暗緑色の釉がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。他に長方形透しと波状文をもつ破片が出土している。

小型壺

29はII区の墳裾からの出土で、復原口径は16.4cmである。口頸部は上外方にのびて、端部は肥厚して丸く、下方に1条の凸線がめぐる。外端面は内傾する平面をなす。灰色を呈し、胎土焼成は良好である。

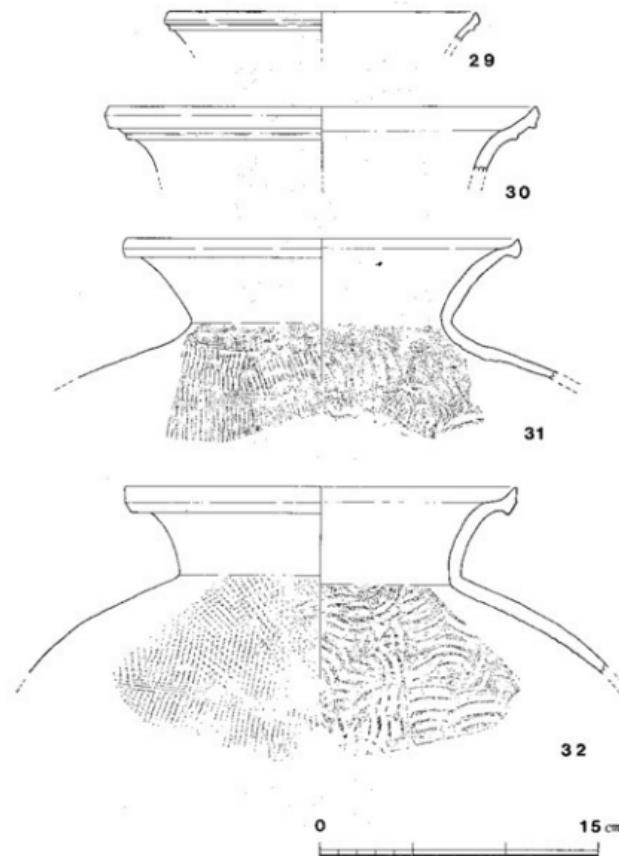
中型壺

30はIV区出土の破片で、復原口径は22.9cmである。口頸部は外彎気味に上外方にのび、端部は上下に肥厚してほとんど丸くおさまる。その下に凸線を1条めぐらせる。外端面はほぼ垂直な凸面となる。暗青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。31はIII区出土のもので、復原口径21.0cmを測る。口頸部は直線的に外反してのび、端部を上下に肥厚させる。特に、端部内面を強くなされることによって四面をつくり出し、鋭い稜をなしている。外端面はほぼ垂直な凸面である。肩部は外下方へ強く張り出す。体部外面は太い平行叩き、内面は同心円叩きのち弱い半入り消しナデが施され、他は回転ナデ調整である。青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。32もIII区出土のもので、復原口径21.1cmを測る。上外方にのびる口頸部と、内彎気味に外下方へ張り出す肩部をもつ。口縁端部は31と同じ手法を用いており、外端面は外傾する凸面となる。体部外面は平行叩きのち弱いカキ目調整、内面は同心円叩きのち半入り消しナデ調整が施されている。外面は灰色で、頸部には暗緑色の釉が認められるが、体部内面は黒色を呈する。胎土には若干砂粒が含まれており、焼成は良好である。

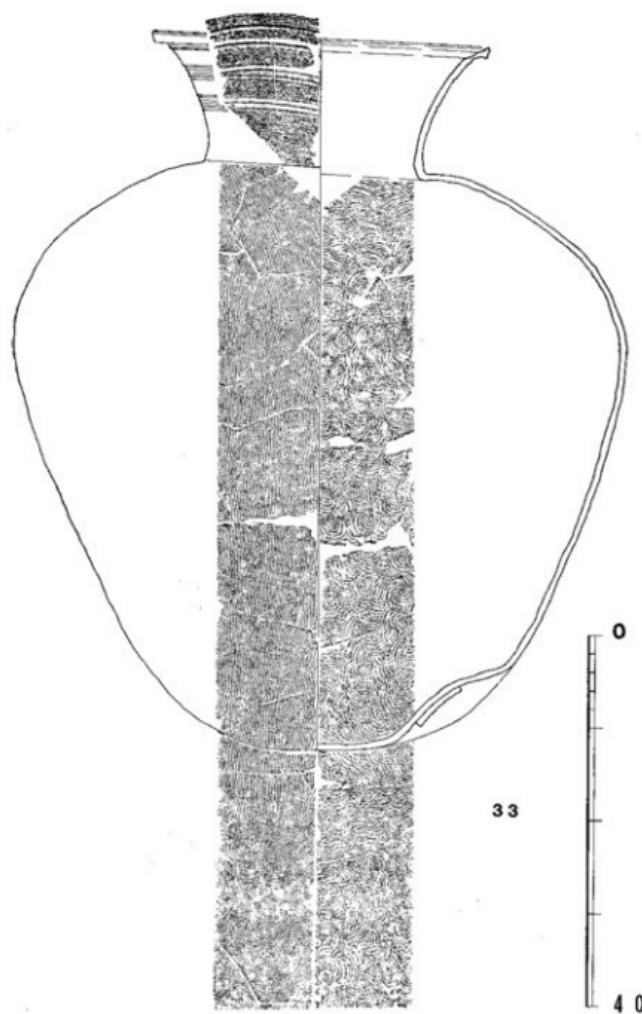
大型壺

2個体はそれぞれ大壺Aと大壺Bに相当する。33は大壺Aで、口頸部と胴部の大半を欠損する。復原口径36.2cm、器高77.0cm、胴部最大径66.0cmである。口頸部は外彎して上外方にのび、端部は上下に肥厚し丸い。外端面は外傾し、上部に弱い沈線がめぐる。端部下方に1条、さら

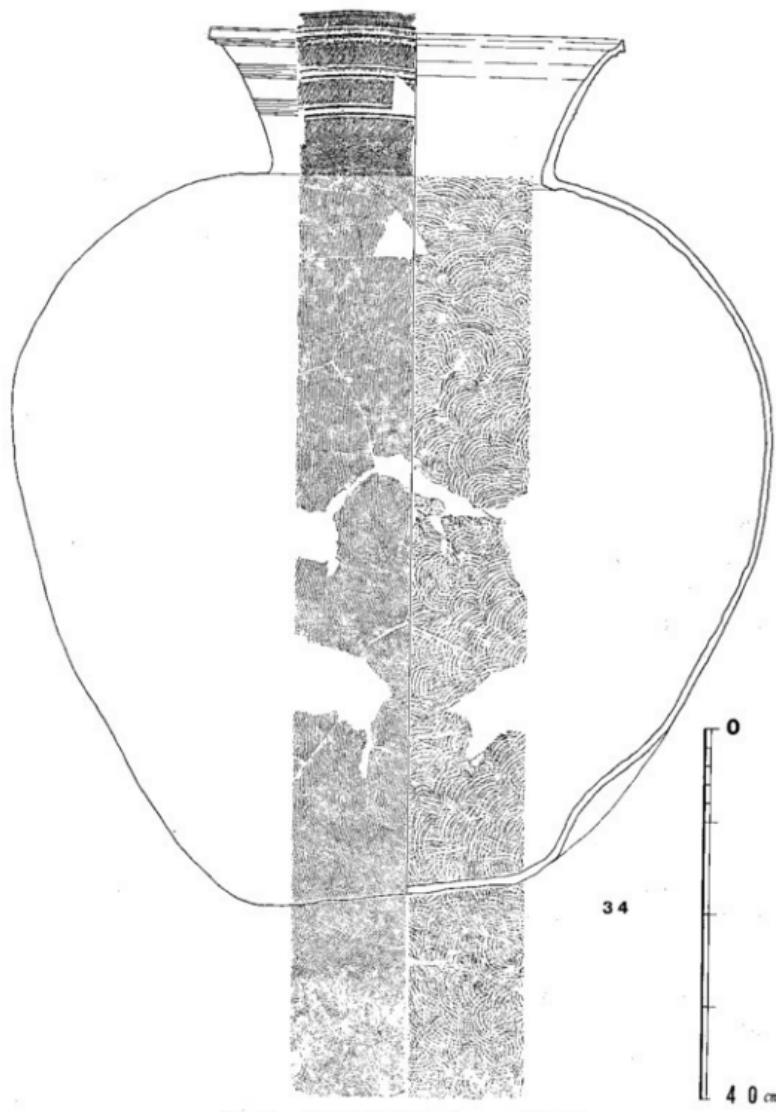
に2条ずつ2段の凸線を施し、その間を9本単位の波状文で埋めている。凸線は鈍く、凹線を上下にめぐらせて仕上げられた程度である。肩部は内彎気味に外下方へ張り出し、先上位に体部最大径を有する。体部外面は細い縦位平行叩き、内面は肩部と底部周辺で同心円叩きが顕著であるが、他の部分は円弧叩きとなる。体部下半に2個所ひずみがあり、大きく内面にくぼんでいる。色調は外面が暗青灰色で、内面は暗灰褐色を呈する。胎土は密である。焼成は良好で



第11図 出土須恵器実測図 III (s=16)



第12図 出土須恵器実測図 IV (s=36)



第13図 出土須恵器実測図 V (s=36)

一部に釉がかかっている。

34は大甕Bである。33を大形にしたもので、両者はほとんど同一の形態を備えている。口頸部は直線的に上外方にのび、端部は上下に肥厚し、比較的鋭く仕上げられている。外端面は内傾し、上部に弱い沈線を施す。端部下位に凸線を1条、頭部中位と $\frac{3}{4}$ 上位に鈍い凸線を2条ずつめぐらせ、各凸線間に $\frac{1}{2}$ 上位に9本単位の波状文を1条ずつ、計3条刻んでいる。体部は最大径を $\frac{3}{4}$ 上位に有しており、33より胴の張りが強い。底部は平らに近く、ほぼ安定している。口頸部は回転ナデののち、カキ目調整を行う。胴部外面は細い平行叩きで、下半部は斜方向の叩きと交差し、底部には同心円をなすカキ目が残る。内面は同心円叩きで、特に、肩部付近では上から下へ叩きが行われたことがわかる。また、底部には、焼成時に葉状のものを敷きつめたような痕跡を残している。色調は外面は暗青灰色で、一部釉がかかり、内面は青灰色、断面は暗赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。

(3) 土師器

壺

土器窯の中から須恵器とともに出土したが、細片のため同化することができない。「く」の字状に短く屈曲した口頸をもつ壺である。赤褐色を呈し、焼成は不良で非常にもろい。磨滅が著しく、調整は不明である。この他、VI区墳壙より、淡灰褐色の土師器細片が出土している。

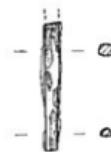
(4) 鉄 器 (第14図、図版10—2)

鉄 鐗

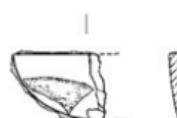
35は尖根式の茎部であり、III区の墳頂の赤褐色土層から出土した。現長4.5cmで、断面は大略方形を呈すが、一部三角形になる部分もある。表面に木質が遺存している。

直 刀

36はI区墳頂の赤褐色土層からの出土である。現在3.3cm、身幅2.4cmを測る。平棟で厚さは0.5cm、身の断面は二等辺三角形を呈する。表面に木質が遺存している。



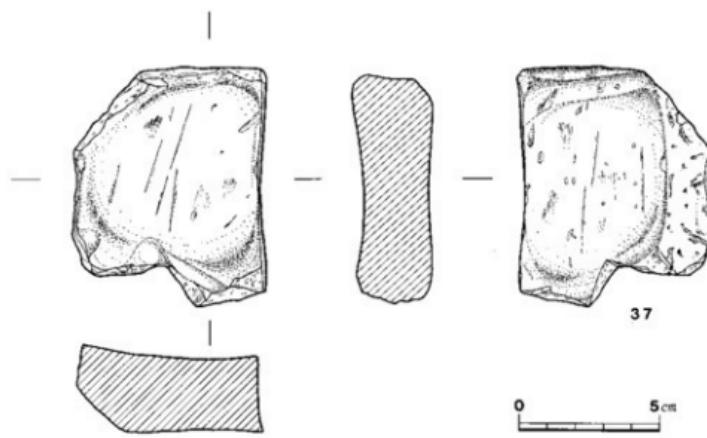
35



36

0 5 cm

第14図 出土鉄器実測図 (s = 3/2)



第15図 出土石器実測図 (s=1/2)

(5) 石 器 (第15図、図版10—2)

砥 石

37はIV区の周溝から出土したもので砂岩製である。一部を欠損しているが、現長8.5cm、幅6.9cmを測る。両面に使用痕をとどめており、浅い凹面となる。

(6) そ の 他 (第16図)

古 錢

38は寛永通宝で、III区の表土より出土したものである。



第16図 出土古錢拓影 (s=1/2)

V ま　と　め

今回調査を行った笛田古墳は、木棺直葬墓を埋葬主体部とする、直径約7m前後の円墳である。しかし、墳丘は削平を被っているため、主体部の詳細は明らかではなく、群集墳の中の1基を知り得たのみで、群構成やその中の位置づけといった、大局的な把握は困難である。ただ、ここで得られた遺物は、そうした墳丘の規模や擾乱を考慮に入れても器種・量ともに比較的豊富であるため、特に須恵器を取り上げて二三の問題に触れてみたい。

(1) 祭祀形態について

墳丘周辺部から検出された須恵器から埋葬に伴う葬送儀礼の一端を知ることが可能である。⁽¹⁾ それらは出土状態によって大きく3種類に分類できよう。ひとつは原位置を保っていると考えられる大壺、次に土器窓内の杯、杯蓋、高蓋、そして墳丘、周溝から破片として出土した疊、直口壺、短頸壺、装飾付台付壺、甕である。

大壺は据え置くための掘り方がかなり浅く、焼成後の底部穿孔も認められないため、追葬の甕棺墓であるとは考え難い。おそらく、正置状態に据えて祭祀に使用されたものであろう。⁽²⁾ また、大壺の口頸部と胸部上半が旧地表面直上に散乱していることから、祭祀終了後長い時間を経ないうちに破碎されたと思われる。⁽³⁾ ここで、横穴式石室をもつ古墳において、火壺がしばしば後部周辺に置かれている事例に注目すれば、本墳の場合、墳頂から2個の大壺の間を見通した延長線上の眼下にのみ冲積平野が広がっており、これを墓道としての意識の反映と考えることも可能ではなかろうか。

土器窓の土塗内の須恵器には、食物等の遺存は認められなかった。出土状態も杯が伏せられていたり、杯蓋が側壁に立てかけられていたり、高杯に蓋が被せられていないことなどから、本来これらの須恵器には、食物を供獻する目的は否定されていたと言えよう。つまり、土器窓内の杯、杯蓋、高杯は葬送儀礼の参加者の飲食器であり、儀礼終了後一括して土塗に埋納されたという見解に合致する資料とみなしうる。また、それは儀礼の対象者と祖先との共食と想定される。⁽⁴⁾

墳丘、墳側、周溝からの出土土器は主体部のカットという要因もあり、棺内、棺側へ副葬されたものと、墳丘上での祭祀に使用されたものの2種が混在している可能性が高い。しかし、棺内に土器を入れる例は一般化せず、棺内、棺側に置かれる器種は杯と高杯が多くみられるという事実を考えれば、本墳のこれらの土器の大半は墳丘周辺でとり行われた祭祀の痕跡を示す

ものであり、儀礼終了後、故意に破砕、散布されたものとして大過なかろう。直口壺、短頭壺などの器種構成や、儀器としての性格が強い装飾付台付壺の存在からもそのことが窺い知れる。

以上、須恵器を出土状態より3群に分類してそのあり方を検討してきたが、それぞれ3様の相異った様相を呈している。しかしこれらは、各々分離した祭祀の形態を示すものではなく、一連の葬送儀礼における個々の姿であることは疑いない。

(2) 須恵器について

出土した須恵器は器種に富んでおり、杯蓋、壺の一部に若干の時期差を看取しうるが、祭祀という性質上、その他の土器の大半はほぼ同一時期の所産であると考えられる。の中でも比較的の數量が整い、同一性をもった、土器溜内の杯、高杯、杯蓋と、儀器と考えられる装飾付台付壺を取りあげたい。

土器溜から出土した須恵器は、高杯I類9個体、II類1個体、杯身1個体、杯蓋I類7個体、II類1個体、III類(杯身蓋)1個体である。形態、色調、胎土、焼成等すべての点で高杯I類と杯蓋I類とはセットになると思われるが、個々の明確なセット関係が把握できるのは高杯18と杯蓋1にすぎない。また、高杯II類と杯蓋II類、杯身と杯蓋III類はセットと認められる。さて、高杯I類、杯身、杯蓋I類、III類は、焼成時に胎土中の鉱物が溶出したような痕跡が残り、0.1mmから4.2mm大の光沢をもつ黒褐色の焦点が器表全面に観察できる。しかし、こうした特徴は高杯II類、杯蓋II類には現れず、色調、胎土、焼成ともすべて異なる別系統の須恵器であり、土坑内に他の須恵器に混って1セットだけ出土したことは、先述の祭祀の性格を考え合わせても興味深い問題を含んでいると言えよう。

土器溜内のこうした須恵器は、細部にしばしば古式の様相をとどめている。しかし、調整の粗雑化と簡略化が著しく、また、大型化の傾向が強い。高杯I類では最小口径11.0cm、最大口径11.9cm、平均11.4cm、杯蓋I類では最小口径12.9cm、最大口径14.2cm、平均13.5cmを測り、I期からII期への過渡期、もしくはII期以降と考えられ、遅くとも6世紀前半に比定されよう。

さて、これらの須恵器から見出せる諸特徴は地方窯独自のものであり、本墳から出土した土器は地方窯における須恵器生産の初段階の製品と考えられる。西播地方での地方窯の定着は、相生市那波野・丸山窯跡、揖保郡御津町・碇岩窯跡が知られており、いずれも6世紀前半のものである。器高1m前後の大壺を遠隔地から搬入することは困難を極めるであろうことを考慮に入れれば、本墳出土の須恵器も先述の窯跡、もしくはその周辺で焼成された蓋然性は高いと

⁽¹⁰⁾
と言えよう。

最後に装飾付台付壺に言及しておきたい。この種の須恵器に関しては、すでに詳細な論考がなされており、本墳の所在する揖保川流域における装飾壺とそれを出土する古墳の問題も明らかにされている。ここで再びその古墳を列挙すれば次の通りである。

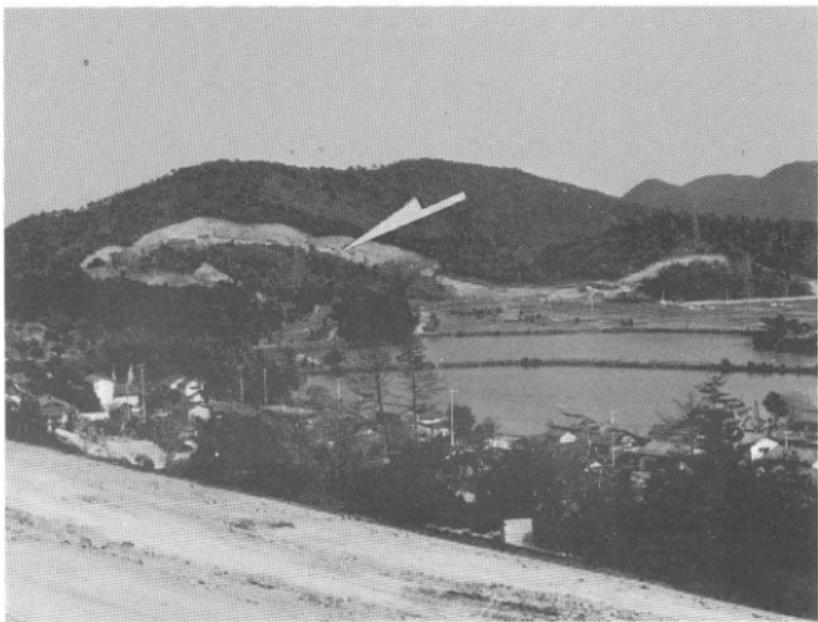
西宮山古墳	(竜野市日山)
姥塚古墳	(揖保郡新宮町馬立)
中垣内古墳群の一古墳	(竜野市揖西町中垣内)
合利田磐山4号墳	(竜野市磐田町合利田)
小丸山古墳	(揖保郡御津町中島)

⁽¹¹⁾
これらの古墳から出土した装飾付台付壺は、いずれも6世紀中葉以降に比定され、磐山4号墳を除き横穴式石室内部に埋納されていたものである。本墳からの出土例は、以上の例と比較して時期は若干さかのぼり、埴丘周辺での祭祀に使用された点で様相を異にしている。また、西宮山古墳と小丸山古墳は装飾付須恵器を複数出土し、その他の副葬品や埴丘の規模などから地域集団の首長墓と考えられており、単一に装飾付須恵器を出土する古墳は、小規模な農業共同体の首長墓に想定されている。しかし、磐田古墳においては、鉄鏃と直刀以外に副葬品を知り得ず、埴丘の規模をとり上げて考ても、同時期他の古墳を凌駕する要素は全く認められず首長墓という名称を与えることには躊躇せざるを得ない。ただ、本墳における装飾付須恵器を含めた祭祀の盛行を、前段階にみられる政治的意義をも含んだ葬送儀礼の残存とみなし、そこに非等質的な卓越性を認めうるならば、被葬者を胎頭しつつある首長クラスとする評価も、あながち間違いではなかろう。いずれにしても、時期差をもった木棺直葬と横穴式石室という墓制の相違や、祭祀形態の変遷などを考えるうえでも、興味深い問題をはらんでいると言えよう。

- 註 (1) 小林行雄 「黄泉の喫」『古墳文化論考』 1976、白石太一郎「ことどわたし考」『櫻原考古学論集』 1975
- (2) 亀田 博 「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第23巻第4号 1977
- (3) 古墳築造後に据え置かれ、底部に穿孔のある例も指摘されている。
桐原 健 「古墳出土の大甕」『古代文化』第23巻第11号 1971
- (4) 註(2)によれば、大甕は死者の通路を画するものであり、註(3)によれば、古墳の入り口に置かれた大甕は精霊が宿るものとされている。
- (5) 石山 熊 「古墳における古代須恵器のあり方について」『九州経済自動車道関係埋蔵文化財調査報告X』 1977

- (6) 河村好光 「後期古墳の編成秩序とその展開」『考古学研究』第27巻第1号 1980
- (7) 註②と同じ
- (8) 平安学園考古学クラブ 「陶邑古窯址群Ⅰ」 1966
- (9) 松本正信 「考古学からみた龜野」『龍野市史第1巻』 1978
大村敬通 「山陽地方の古代・中世窯」『日本やきもの集成 9』 1981
- (10) 是川 長氏の御教示によれば、丸山窯での生産の可能性が高い。なお、志水豊章氏の御好意で丸山窯出土の須恵器を実見する機会を得た。深謝。
- (11) 岸本雅敏 「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第22巻第1号 1975
- (12) 註④では5号墳と記されているが、兵庫県教育委員会「兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表」 1969、ならびに松木正信氏の御教示により、4号墳とする。
- (13) 三村修次氏の御教示によれば、上述の古墳以外に、近隣部では、揖保郡太子町大田、黒岡山古墳からも出土しているという。内部主体は横穴式石室である。
- (14) 註④による5号墳の内部主体は箱式石棺あるいは組み合わせ式石棺であるが、5号か4号のいずれにしても、表様に近い状態で得られた装飾付須恵器であるため、ここでは一応除去する。
- (15) 註④と同じ
- 松本正信 「考古学からみた龜野」『龍野市史 第1巻』 1978

図版 1 篠田古墳



1. 古墳遠景（西から）



2. 古墳全景（調査前）

図版2 墳丘



1. 墳丘全景（トレンチ設定後）



2. 墳丘全景（調査後）

図版3 土器溜



1. 土器溜出土状態（北から）



2. 土器溜出土状態（東から）

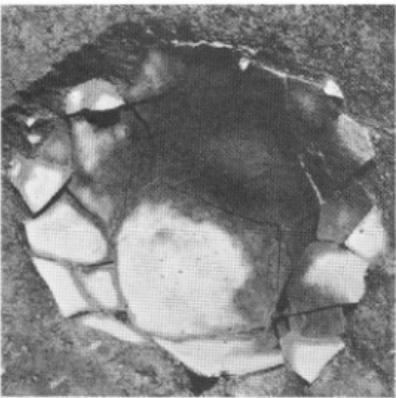
図版4 大甕



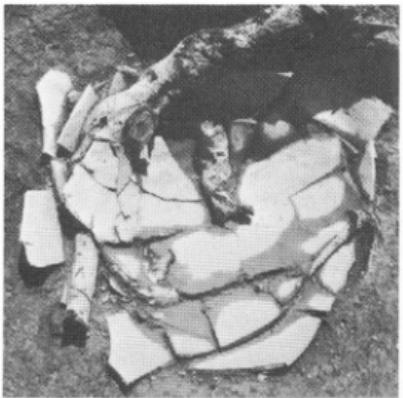
1. 大甕出土状態



2. 大甕底部据付状態



3. 大甕B



大甕A

図版5 III区墳丘標部

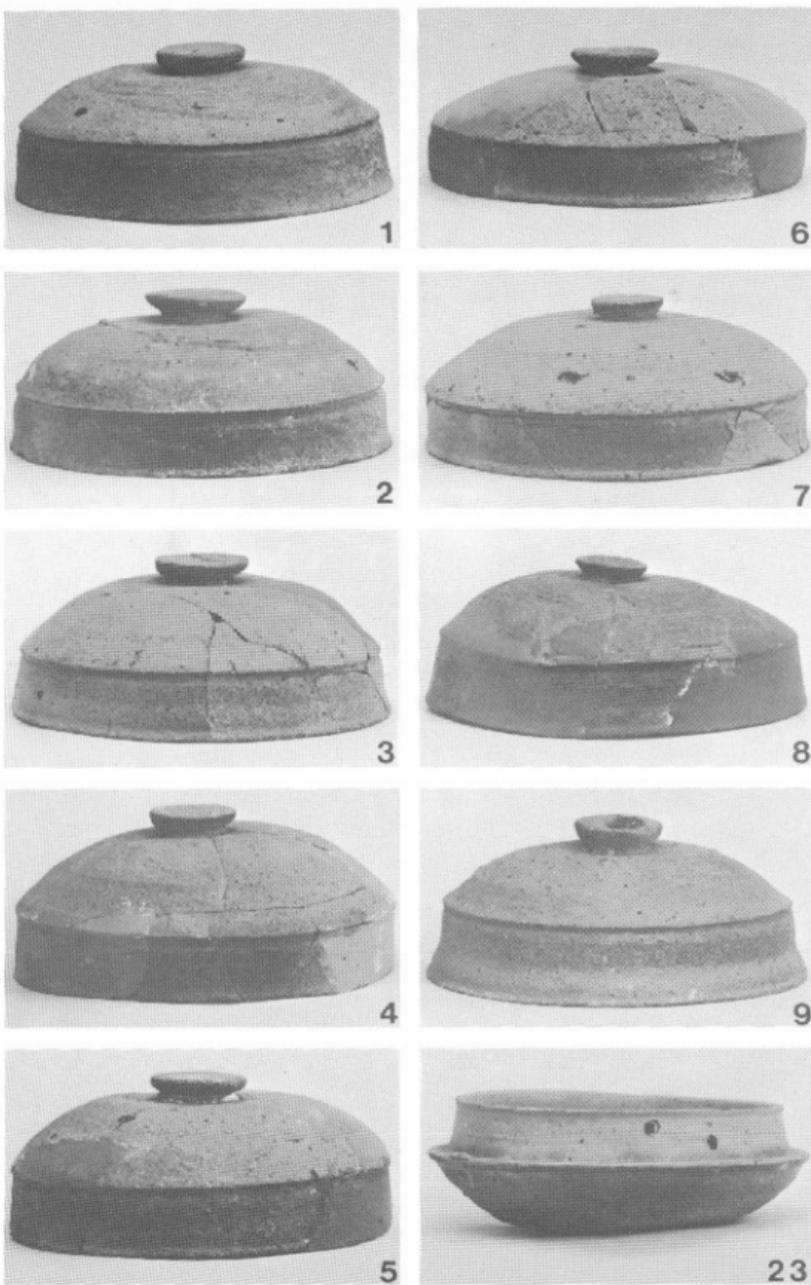


1. 大型掘り方検出状態



2. III区土器窯と大型掘り方

図版6 出土遺物I



土器塗内須恵器(1)



12



16



13



18



14



19

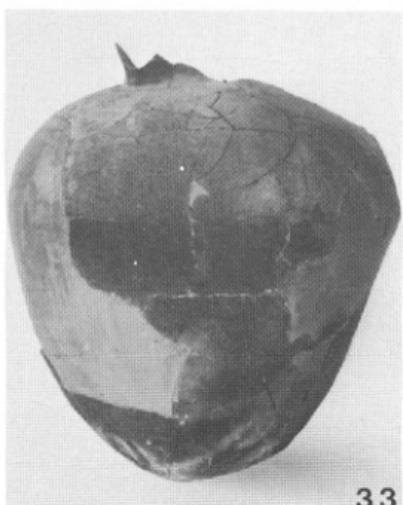
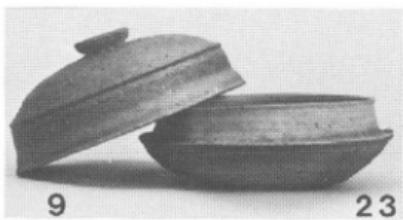
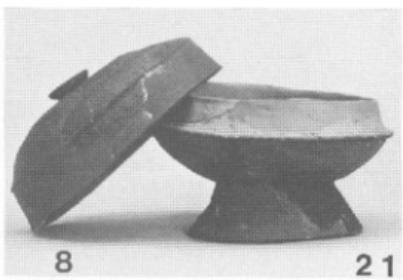
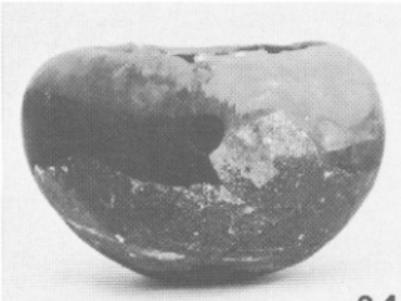
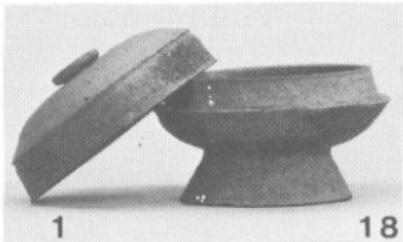


15



21

図版8 出土遺物Ⅲ

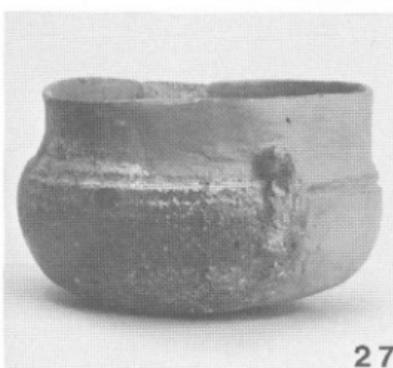


須恵器(1)

図版9 山土遺物IV



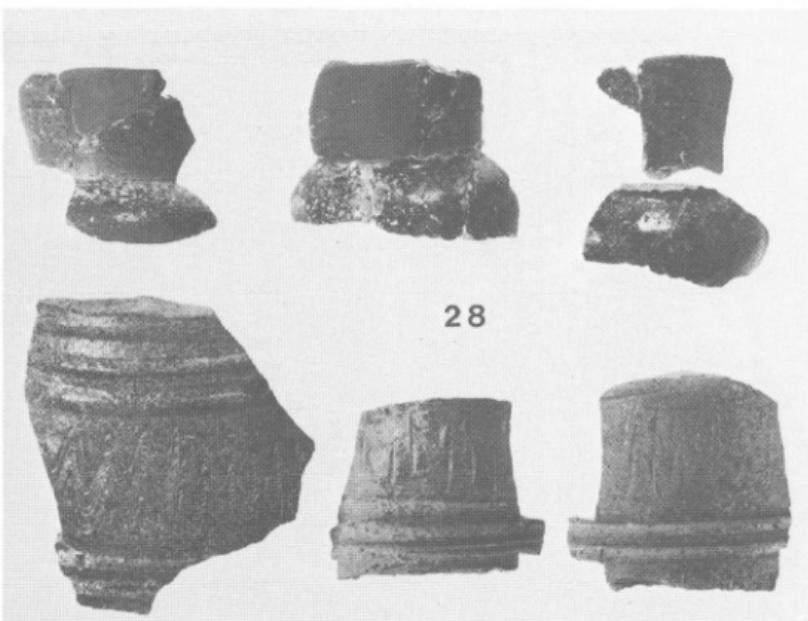
31



27

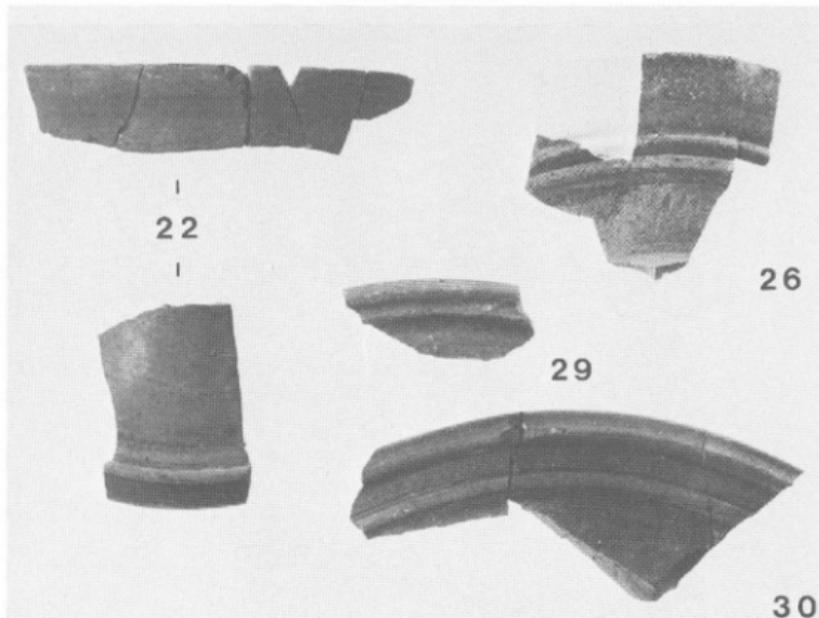


28

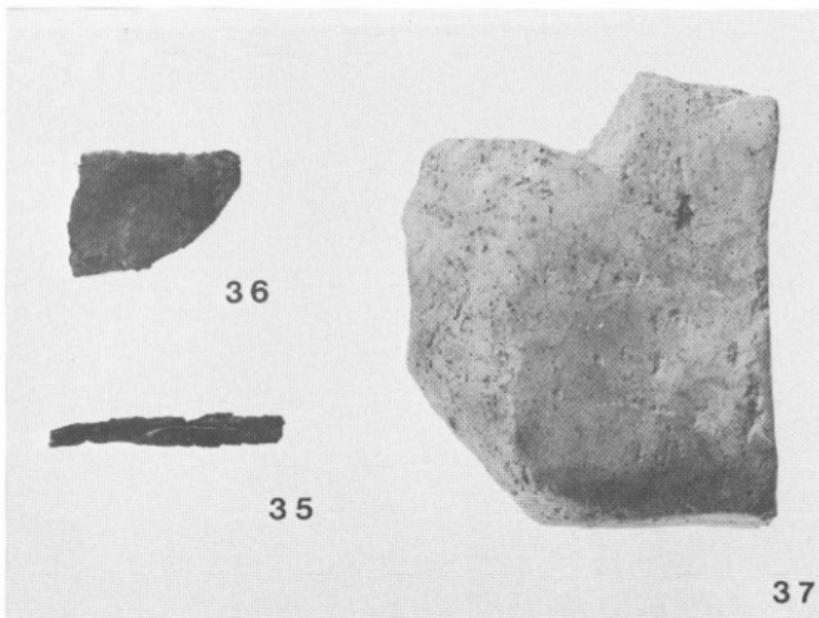


28

須恵器(2)



1. 須恵器(3)



2. 鉄器、石器

山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 I
征 田 古 墳

昭和57年3月31日 発行

編集者 兵庫県教育委員会

発行者 兵庫県教育委員会

印刷所 株式会社 精 文 舍